

新 家

(その3)

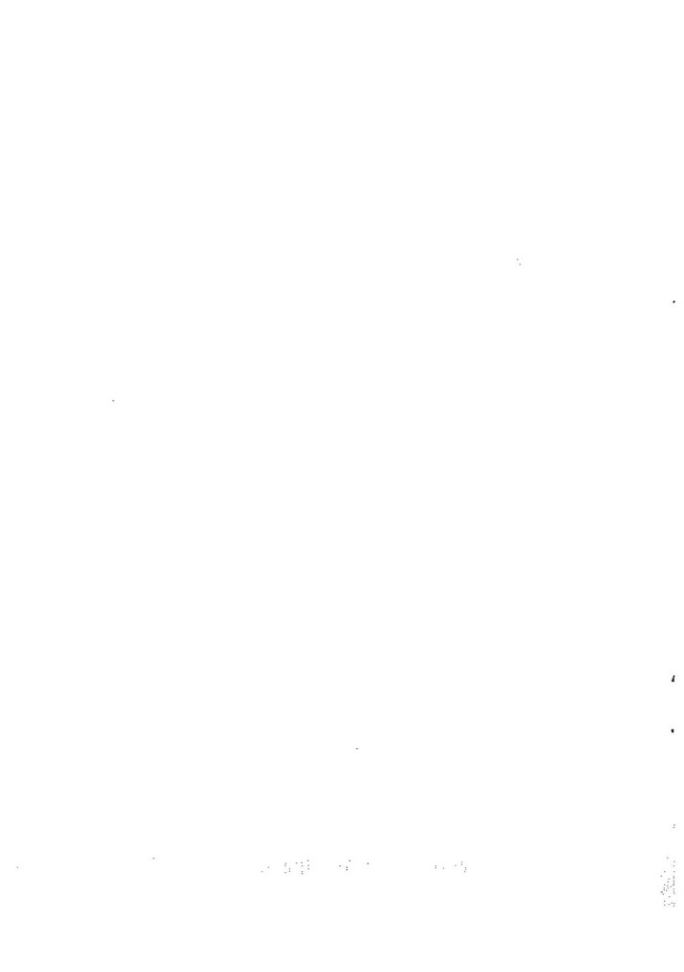
近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

財団法人 大阪文化財センター

新 家

(その 3)

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書



序 文

新家遺跡は、昭和40年に建設された府道中央環状線工事中に木製の梯子が発見されたことにより、知られるようになり、意岐部小学校周辺からの弥生時代後期から平安時代にわたる遺物の採集などから昭和49年に遺跡範囲調査を実施した結果、古墳時代を中心とした集落跡遺跡であることが確認された。

本遺跡の周辺には西岩田遺跡、瓜生堂遺跡、岩田遺跡等の遺跡が存在する。本遺跡は、これら遺跡群の最北端に位置し、河内湖の変遷と集落の発展との関係を検討するのに重要な遺跡である。

この新家遺跡は、近畿自動車道天理・吹田線の建設に先立ち昭和54年から昭和56年にかけて発掘調査を実施し、その結果、試掘調査により得た成果以上に成果を上げることが出来、縄文時代晩期から平安時代にかけての集落跡であることが判明した。

本調査報告書は、前回調査を実施後、遺跡範囲の拡大ならびに、府営工業用水管の布設替えに伴い昭和57年より昭和58年にかけて実施した発掘調査の報告書である。

本調査の実施にあたっては、日本道路公団大阪建設局、財団法人大阪文化財センターをはじめ調査関係者並びに一般多数の方々のご協力、ご援助をいただいたことに深く感謝すると共に、今後とも温かいご支援を賜わるようお願い申し上げます。

昭和59年2月

大阪府教育委員会
文化財保護課長 籾内盛雄

序 文

現在の大阪平野の中央部に存在した“河内潟”及び“河内湖”は、縄文時代～弥生時代～古墳時代と時間の経過と共に変貌し、古代の人々の生活に直接的あるいは間接的に影響を与えながら平野となってきた。

この湿潤な低地は、万葉の時代、“豊草原”と呼ばれ、特に我國の稲作農耕文化と密接に係わりを持っている。

その昔、縄文時代には、平野よりむしろ入海としての潟が、人々の生活と密接に関係を持っていたであろうし、弥生時代以降は現在に至るまで人々の生活や生産の場として機能してきたことは明らかである。

近畿自動車道天理～吹田線にかかる14遺跡の調査は、大阪府教育委員会、日本道路公団より継続的に調査を依頼され、すでに長原、瓜生堂、巨摩庵寺、新家、西岩田、友井東、若江北、山賀、亀井の計9遺跡の本線部分の調査が完了し、美園、佐堂、久宝寺、城山、大堀城の5遺跡の本線部分の調査と、山賀、長原等の追加部分の調査を実施している。

本書は、昭和58年4月に調査が終了した東大阪市荒木西2～3丁目に所在する新家遺跡（その3）の発掘調査の概要を記したものである。

その昔、入海と平野の接点に位置する当該遺跡は、人々の自然との係わりの歴史を如実に物語っていると同時に、自然環境の変化に最も敏感なこの地を利用した人々の自然に対する血のにじむ闘いと、敗北そして再挑戦の歴史を今日まで伝えていていることを御理解願えることと思う。

調査は、送水を継続している工業用水管2本（ $\phi 1800$ 、 $\phi 1650$ ）を吊り防護しながら、その下層の発掘をするという極めて困難な条件の中で、成果を挙げた調査関係者一同に敬意を表するとともに、大阪府東部水道事業所、日本道路公団及び工事関係者一同に感謝する次第である。

最後に、大阪文化財センターは、設立以来、与えられた使命を果しながら、着実に発展してきた。今後、職員一同より一層の研鑽、努力を覚悟するとともに、一般府民の方々を始め、関係各位のあたたかい御理解、御支援を願ってやまない。

昭和58年4月

財団法人 大阪文化財センター

理事長 加藤 三之雄

例 言

1. 本書は、日本道路公団が建設を進めている「近畿自動車道天理～吹田線」の荒木ジャンクション建設工事に伴い、東大阪市荒木西2・3丁目に所在する新家遺跡の発掘調査概要報告書である。
2. 今回の調査は、1979年7月から1982年11月にかけて調査が行われた本線部の調査（新家）新家（その2）-（SINⅡ）と区別するため、新家（その3）-（SINⅢ）と略称することにする。
3. 新家Ⅲの調査は、財団法人大阪文化財センターが日本道路公団の委託を受けて行った。
4. 本調査に要した費用 8,598,000円は、日本道路公団が負担した。
5. 現地での調査は、1983年3月8日から1983年5月25日まで行った。
また、整理作業は発掘調査と並行して行い、その後の整理作業は1983年5月31日まで行った。
6. 本調査は、大阪府教育委員会の指導のもとに、財団法人大阪文化財センターが行った。
現地での調査は、業務課主任兼第1係長、中西靖人のもと、第1係技師、国乗和雄が担当した。
7. 現地での調査及び、報告書の作製には、下記の学生諸氏の参加、協力を得た。
土生 稔、吉井裕武、木下雅之、増本真治、横山真弓、藤田愛弥、足立貴美、田中美和子、宮北千秋
8. 本書の執筆は、1の調査に到る経過を中西が行い、他は国乗が担当した。また、遺物実測及び遺物トレースについては、業務第1係技師、上西英佐子、岸本道昭、現地調査の執筆については、業務第2係技師、村上年生の協力を得た。
9. 本書に掲載した写真は、業務第2係技師、片山彰一が担当した。

凡 例

1. 遺構実測図の縮尺は、トレンチ全体が入るもの…1/200、部分的なもの…1/40とした。
2. 遺物実測図の縮尺は、木器、土器、須恵器、陶器…1/4、石器…1/2、土製品…1/2とした。
3. 遺物実測図の番号は、通し番号とした。
4. 調査における座標軸は、国土座標軸を用いた。

目 次

例言

凡例

1. 調査に至る経過	1
2. 調査方法	1
3. 調査結果	2
1 トレンチ 基本層序と出土遺物	2
遺構及び出土遺物	8
2 トレンチ 基本層序と出土遺物	9
遺構及び出土遺物	10

挿 図 目 次

図 1 遺跡周辺の地形図	2
図 2 トレンチの位置	3
図 3 1 トレンチ断面模式図	4
図 4 木器実測図 (34)	5
図 5 土鍾、円盤状土製品実測図 (35)	6
図 6 弥生式土器実測図 (34)	6
図 7 須恵器、中世陶器実測図 (34)	7
図 8 石器実測図 (35)	7
図 9 1 トレンチ・I 層上面溝状落ち込み実測図 (34a)	8
図 10 1 トレンチ・K 層上面実測図 (3400)	9
図 11 2 トレンチ断面模式図	10
図 12 2 トレンチ・K 層上面実測図 (3400)	10

写真図版目次

図版 1	1 トレンチ遺構 (I 層上面溝状落ち込み)、断面 (V 層以下断面)
図版 2	1 トレンチ遺構 (K 層上面落ち込み)、断面 (K 層以上断面)
図版 3	2 トレンチ平面 (機械掘削終了時・K 層上面)、断面 (V 層以下断面)
図版 4	土器・土製品・石器・木器
図版 5	弥生式土器

1. 調査に至る経過

近畿自動車道天理～吹田線にかかる新家遺跡の発掘調査は、昭和54年6月から昭和56年3月まで実施した本線部の調査と、昭和56年10月から昭和57年12月までの間に実施した阪神高速道路との相互乗り入れの為に第3ランプ部分の橋脚予定位置の調査が終了している。これら2次にわたる調査で、当該遺跡のほぼ全容が明らかとなり、弥生時代前期から古墳時代を中心とした遺跡として、また河内平野における最も低い場所に存在する特殊な性格も明らかとなってきた。

今回、実施した新家遺跡の調査は、上記第3ランプと同様に、相互乗り入れレーンとしての第4ランプの建設に伴ない、中央環状線西側の北行車線グリーンベルト内に存在する大阪府水道部の工業用水管を移設する必要が生じたため、この切替に必要な発進坑及び到達坑の2ヶ所について調査を実施したものである。

調査は、発進坑が本線部分で調査の対称となったAトレンチの南端部分に約3㎡の未調査部分が残っていることと、到達坑全幅16.5m×8mの部分に含まれる工業用水管埋設時に破壊されていない部分が残っていることが明らかとなったことから、この未破壊部分の調査を実施したものである。

発掘調査は、昭和58年3月3日付で大阪府教育委員会、日本道路公団、当センターの3者契約を締結し、現地における発掘調査を昭和58年3月から58年4月迄実施し、その後、58年5月まで本書作製のための総括整理を終了した。

2. 調査方法

調査は、最上部に堆積する埋戻土等の攪乱層は機械掘削で取り除き、それより下層は人力掘削によった。

1トレンチ（到達坑）では、トレンチの東坡及び西坡に直径1.8mと1.4mの2本の工業用水管が南北方向に貫通しており、かなりの広さで攪乱を受けていた。このため、T.P. 2.3m付近より上層部では、中央部の狭小な部分のみが調査の対象となった。また、下層部ではトレンチ全域に自然な堆積層が残存していたが、工業用水管が調査の妨げとなって満足のいく調査を行うことができなかった。

断面実測は、以上のような悪条件から、上層より下層へとつながる実測には無理を生じたために、断面略図を作製した。

2トレンチ（発進坑）は、新家のAトレンチのトレンチ部とかなりの部分が重複しており、Ⅱ層上面迄は、南端隅の約3㎡が残っていたに過ぎなかった。またⅡ層以下においては、新家の調査時にⅡ層以下を残していたが、Aトレンチ担当者との連絡が不十分であったために、トレンチ中央部から北坡部分については、間違えて機械掘削を行ってしまった。このため、Ⅱ層以下では、図-12のように不定形な部分の調査を行うこととなった。

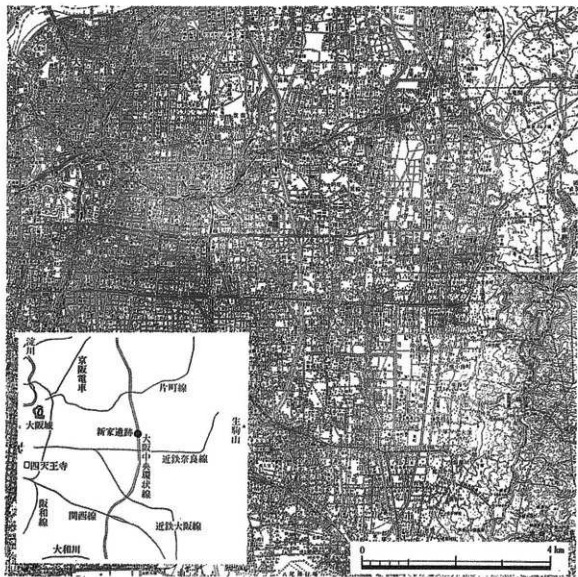


図1 叢跡周辺の地形図

3. 調査結果

○ 1 トレンチ

基本層序と出土遺物

○ 1 トレンチの層序を、新家（その2）の調査で確認している基本層序（新家（その2）の図3）と比較してみると、1 トレンチの東側約50m付近にトレンチを設定した新家（その2）- 9 A・9 B トレンチ（以下、9 A・9 Bとよぶ）に層序や層の堆積レベルが比較的類似することから、それを参考に述べていくことにする。なお、各層の詳しい説明は、新家（その2）の基本層序の項を参照していただきたい。

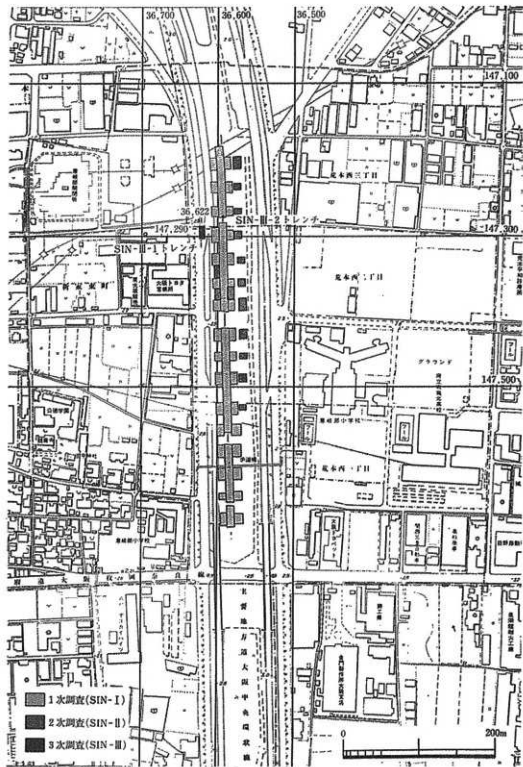


図2 トレンナの位置

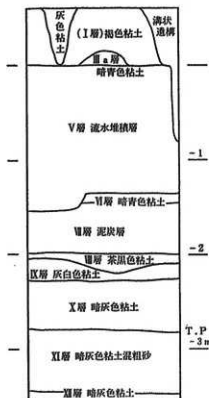


図3 1トレンチ断面模式図
(I層)はSIN-IIのI層とは異なる。)

図3 1トレンチ断面模式図

が、ここでは約1.5mとより厚い堆積であった。なお、層底面レベルがT.P.1.5mと低いことなどから、流水はこのトレンチ付近をかなり強い勢いで流れていたことが考えられる。遺物は、多量の自然木や加工痕をもつ木器(図4-2・3)などが出土している。

遺物、2—有頭棒 全長10.3cm、頭部幅3.8cm、頭部厚2.7cmを計る。端部を魚頭状に尖らせており、全体を鋭利な刃物で削って仕上る。裏面は焼けており、詳細は不明である。

3—棒状木製品 全長38cm、直径2.7~3cm、弓状のやや彎曲する自然木の両端を切り、片方の端部とその下方をえぐっている。

Ⅸ層(暗青色粘土) T.P.-1.4m付近に堆積しており、9A・9Bよりやや深い。層の堆積は、トレンチの北域に片寄っており、南域部分は流水堆積層によって削られている。遺物は、弥生時代前期と考えられる土器(図6-12・17)、石器(図8-23)などが出土している。

遺物、12—壺の底部で、底径8cm、残存高5cmを計る。外面は全体に煤が付着しており、調整はよくわからない。内面はナデを行い、部分的に煤が付着する。

17—甕の底部で、底径6.6cm、残存高6cmを計る。外面の体部には縦方向の細かい刷毛目を荒くつけ、底部はヘラ削りを行う。煤の付着する内面の体部はナデ、底は指押えを行う。

I層(褐色粘土) 9AのⅨ層上に堆積する赤茶色土に対応する層と思われ、約60cm堆積した。遺物は、須恵器(図7-19)、土師器など古墳時代のものがほとんどを占めたが、瓦器も少量含んだ。また特殊なものとしては、外面に叩きをつけた製塩土器が1片出土している。

遺物、19—須恵器杯身 口径9.8cm、残存高3.6cm。内外面ともロクロナデ。たちあがりの形態から5世紀末~6世紀前半のものと思われる。

Ⅱ層(褐色粗砂)・Ⅲ層(黄青灰色粘土) 新家(その2)のほとんどのトレンチでは、Ⅱ層は薄く、Ⅲ層(ⅡA・ⅡB)は比較的厚く堆積するが、このトレンチではⅡA層がトレンチの一部に薄く堆積しただけで、Ⅱ・Ⅲ層の堆積はみられなかった。また、遺物については、新家(その2)のⅢ層からは古墳時代~中世にかけての遺物が出土しているが、ここではみられなかった。

Ⅳ層(砂混黒色粘土) 9A・9Bとも薄く堆積しているが、このトレンチでの堆積は、みられなかった。

Ⅴ層(流水堆積層) 9A・9Bでは、その厚みが約1.2mと新家(その2)の他トレンチより厚く堆積し

23—不定形刃器 片面は稜をもち、他の片面はフラットにつくられている。先端は少し欠けているが、全体の形状から石錐の未製品と考えられる。ナスカイトで重さは12.7g。

Ⅳ層（泥炭層） 藁、草など多量の水生物が堆積した腐植層で、その中には黒灰色粘土と灰色粘土がバンド状に互層で堆積した。この層もⅢ層と同様に9A・9Bよりやや低いレベルに堆積しており、厚みも約55cmと厚い。遺物は、弥生時代前期と考えられる土器（図6-13）などが出土している。

遺物、13—壺の底部。底径は約13cmとやや大型である。外面の体部はナデ、底部は調整が不明。

内面は体部がナデ、底部は強いナデ調整を施している。

Ⅴ層（茶黒色粘土）層の堆積レベルは、T.P.-2～2.2m付近で、9A・9Bより約50cm余り低くなっている。遺物は、土器（図6-7・8・14・16）、土製円盤（図5-6）、木器（図4-1）などが出土した。これらの遺物のうち、土器は弥生時代前期の特徴をもつものが多かったが、他に弥生時代中期初頭の特徴をもつ土器（図版5-24～26）も少量含まれており、新家（その2）で確認しているⅣ層—弥生時代前期という遺物の出土状況とはやや異なった出土傾向を示した。なお、Ⅳ層下面には、遺構状地形が存在したが、その内部にもⅣ層の堆積がみられた。

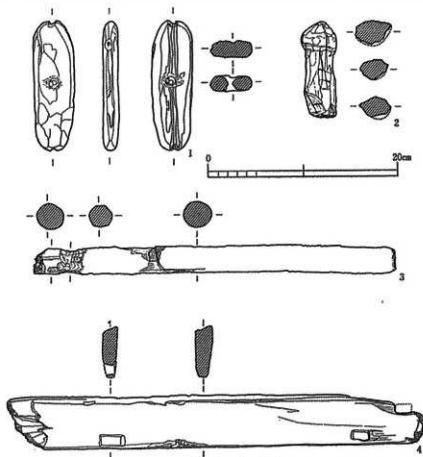


図4 木器実測図

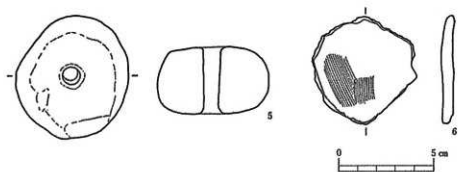


图5 土钵、円盤状土製品実測図

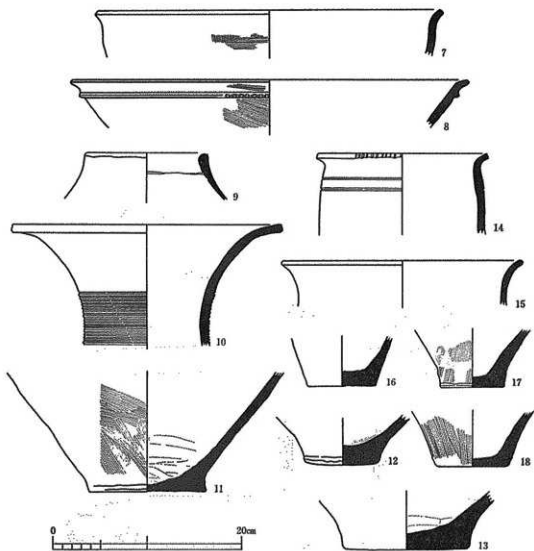


图6 弥生式土器実測図

遺物、7—口径約36cmの大型鉢の口縁部。口縁は内外面ともナデ。体部外面は、横方向の刷毛目の後に縦方向の刷毛目を部分的に施す。また内面は、ナデを部分的に行う。

8—口径約41.6cmの大型鉢の口縁部で、外面には刻み目をもつ突帯を貼りつけている。突帯より上部では、荒い刷毛目の後にナデを行い、下部では左上方から斜め方向の細かい刷毛目で仕上げる。内面は荒いナデを行う。

14—口径17.7cmの甕上半部で、口縁端には刻み目、体部には2本の沈線が入る。調整は内外面ともナデを行う。また、体部外面には熱を受けたための剝離や煤の付着がみられた。

16—底径7cmの甕底部。内外面ともナデを行い、煤が付着した。

6—最大径5.6cmの土製円盤で、紡錘車の未製品と考えられる。外面に刷毛目をもつ甕を用いており、周縁の4分の3余りは丸く加工している。

1—全長13.8cm、最大幅4.3cm、最大厚1.7cmを計る長楕円形のクキである。クキは中央部を穿孔し、表面には幅0.8cm、深さ0.15cmの溝を端部までつけている。穿孔部には三角錐形の穴が数ヶ所につけられており、鋭利な刃物の使用がうかがわれた。また、クキは全体に摩滅しているが、裏面などには刃物で削ったと思われる面が数ヶ所みられ、その部分は炭化していた。

図版5-24~26 すべて壺の体部で、24は流水文、25・26は捺描平行文をつけている。

K層 (灰白色粘土) 層の厚さは、10~25cm余りと9A・9Bの厚みと変わらないが、堆積レベルはやや低い。層の上面では、トレンチ全域にカニ穴がみられた。遺物の出土はなかった。

X層 (暗灰色粘土) 層厚約55cmを計る。遺物の出土はなかった。

M層 (暗灰色粘土混粗砂) 植物遺体を少量含み、層厚は約65cmと厚い。新家(その2)の調査では、縄文土器の出土をみているが、このトレンチでの遺物の出土はなかった。

M層 (暗灰色粘土) 最終掘削面近くのT.P.-3.5mから下にある無遺物層。

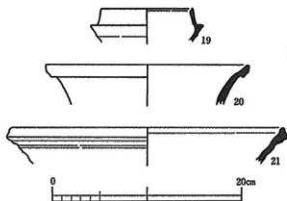


図7 須恵器、中世陶器実測図

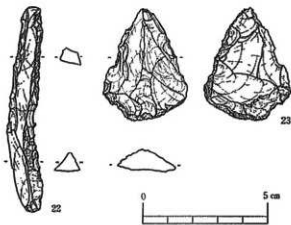


図8 石器実測図

遺構及び出土遺物

Ⅰ層上面-溝状落ち込み(図9・図版1)

トレンチ北端で検出した。遺構の規模は、掘り込み面の肩口から最深部迄の長さ4m、深さ1.1mを計る。遺構南域のノリ面は、肩口から深さ0.3mのところと0.55~0.6mのところフラットになっており、北端が最も深くなる。

埋土は、最上層から灰白色粘土、灰色粘土、灰褐色粘土、灰褐色粘土に灰色砂をブロックで含む層の順に堆積しており、粘土の堆積がほとんどを占めていることなどから、かなり停滞した流れであったことがうかがえる。遺物は、土師器、須恵器(図7-20)などが多くてⅠ層に似た出土傾向を示したが、瓦器や中世陶器(図7-21)なども上層から下層にかけて含んでおり、遺構の埋没年代は中世に比定できるものと考えられる。

なお、遺構は検出状態から東西方向に伸びていることが推測できるが、このトレンチの東側約25m付近での新家・Bトレンチのトレンチ部北端でも整地層(Ⅰ層)を切り込む溝が東西方向に検出されており、当トレンチの溝状遺構につながる可能性は大きい。

遺物、20-須恵器甕口縁、口径21.4cm、残存高4.2cm。内外面ともロクロナデによる。焼成はやや不良で摩滅しているが、口縁の特徴から6世紀前半のものと考えられる。

21-口縁の形状、胎土が播州の魚住窯の遺物に極めて類似するネリバチ。口径28.4cm、残存高3.8cmを計る。内外面ともロクロナデによって仕上る。

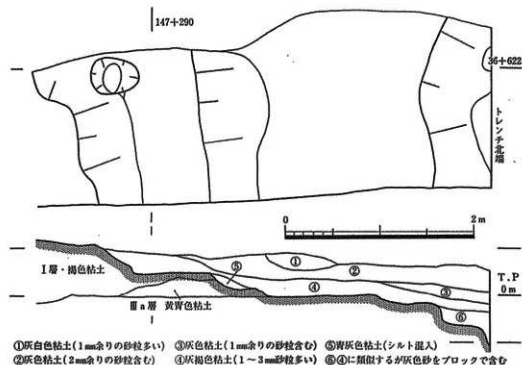


図9 ⅠトレンチⅠ層上面溝状落ち込み実測図

Ⅸ層上面—不定形落ち込み（図10・図版2）

トレンチの中央付近と南端で、直径3～5m、深さ0.2m弱の不定形な落ち込みを検出した。これらの落ち込みは、図示するために一応の上場と下場を描いたもので全体に不明瞭なことから、自然地形の一部にあたるものと考えられる。

遺物は、弥生時代前期と考えられる土器（図6-9、10、11、15、18）、土鍾（図5-5）、石器（図8-22）などが出土している。

遺物、9—無頸壺の口縁で口径13cm、残存高5cmを計る。

外面はほとんど剝離しており、部分的に煤の付着がみられる。内面には粘土紐の接合痕が残り、指押えとナデを行う。全体につくりは荒い。

10—壺の口縁部で、口径28.2cm、残外高12.8cm。

外面の頸部付近は縦方向の刷毛目状のナデの後に横と斜めのナデを行う。口縁内外面はナデを行い、頸部外面には16条以上の拂描沈線を施す。

11—大型壺の底部で、底径12.2cm、残存高12.5cm。外面の体部では、左上方から右下方への荒い刷毛目を密につけ、底部はヘラ削りを行う。また内面の体部はていねいなナデを行い、底部では横方向の強いナデによって仕上る。つくりはていねい。

15—甕の口縁で、口径25.2cm、残存高4.8cm。全体にナデを行っており、外面には煤が付着する。

18—甕の底部で、底径6.6cm、残存高6cm。外面の体部は細かい刷毛目、底部はヘラ削りを施す。内面の体部はナデ、底部は指押えを行う。内面の上半には煤が付着する。

5—土鍾 直径5.7～6.5cm、厚さ3.5cm、重さ98.6gを計る。中央部には直径0.8cm余りの貫通穴を設けた粗雑なビーズ状土鍾である。外面には細かいシワや小孔がみられ、底面には2次焼成を受けたと思われる焼痕が認められる。

22—削器 全長8.2cm、最大幅1.1cm、高さ0.7cmのサヌカイト製で、重さは8.6gを計る。断面は上半が台形、下半が三角形を呈し、裏面は平らである。先端は上・下端ともノミ状に仕上っており、端部付近の表裏面には縦及び横方向の細かい摩き傷がついている。

○ 2 トレンチ

基本層序と出土遺物

層序はこのトレンチに隣接する新家（その2）の9A、9Bトレンチに類似する。

Ⅰ層（灰青色粘土）約30cm堆積しており、陶器、染付などが少量出土した。

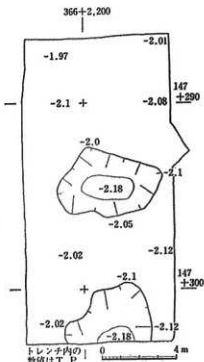


図10 1 トレンチⅨ層上面実測図

Ⅰ層(褐色粗砂)新家(その2)の全てのトレンチで確認されている層で、このトレンチでは5cmと薄い。遺物の出土はなかった。

Ⅱ層(黄青灰色粘土)層の厚みは、30cm弱と9Bよりもやや薄い。ⅢB層からは、須恵器と共に、瓦器の小片が出土している。

Ⅲ層(砂混黒色粘土)9A・9Bよりもやや厚く約25cm堆積した。また堆積レベルは低い。遺物は、須恵器、土師器が少量出土した。

Ⅳ層(流水堆積層)層の厚みは、95cm余りと9A・9Bより約30cm余り薄い。遺物は数点の木器(図4-4)などが出土した。

遺物、4一板状木製品 全長43.8cm、最大幅5.5cm、最大厚1.8cmを計る。板の片面側にはホゾ穴が2ヶ所あけられており、対面の端部にもホゾ穴痕が残っている。麻漕が激しい。

Ⅴ層(暗青色粘土)～Ⅷ層(茶黒色粘土)個々の層の厚みは、10～30cm余りで9A・9Bに類似した。遺物は、Ⅴ層から弥生式土器の壺が1片出土しただけであった。また、Ⅵ層上面では長さ15cm余りの小さな杭が打ち込まれた状態で出土している。

Ⅷ層(灰白色粘土)層の厚さは、10～30cm余りで9A・9Bの約半分である。遺物の出土はなかったが、層の上面には1トレンチでみられたようなカニ穴が存在した。

Ⅸ層(暗灰色粘土)約75cm堆積した。厚みは、9A・9Bにはほぼ等しくて層中には多量の植物遺体がバンド状に堆積した。無遺物層。

Ⅹ層(暗灰色粘土混粗砂)層の厚さは、約55cm。植物遺体、加工木、自然木が多く出土した。

遺構及び出土遺物

ⅡA層上面 Ⅱ層を含む深さ約10cm、幅40～70cmの小溝が東西方向に伸びた。遺物はない。

Ⅳ層上面 長さ165cm、幅10～30cm、深さ約10cmの小溝が東西方向に伸びており、灰色粘土が堆積する。土師器の小片が1片出土した。

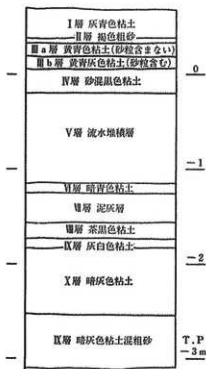


図11 2トレンチ断面模式図

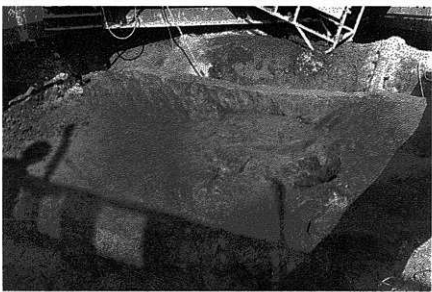


図12 2トレンチⅨ層上面実測図

版 图



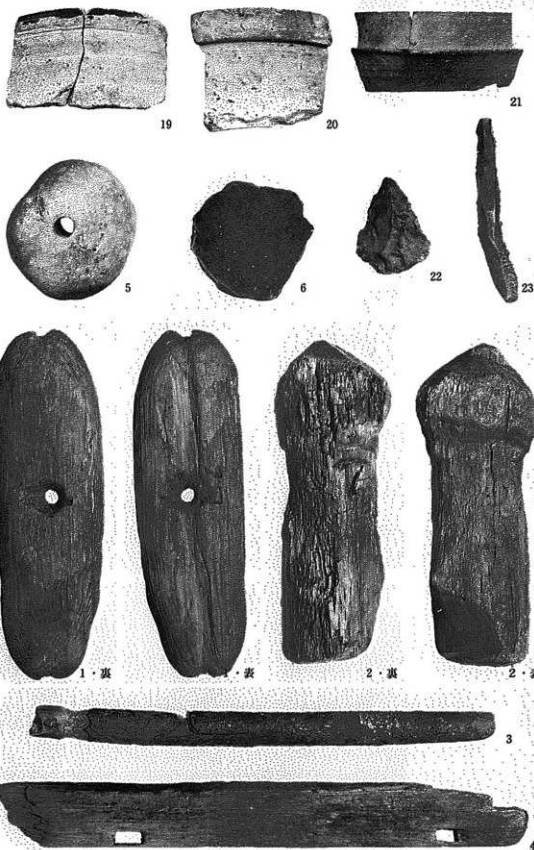
1トレンチ・I層上面
溝状落ち込み調査風景
及び西壁断面〔西から〕



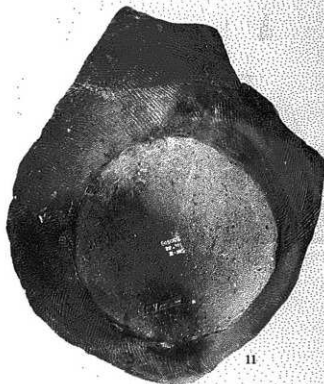
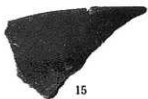
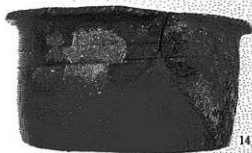
1トレンチ・I層上面
溝状落ち込み〔西から〕

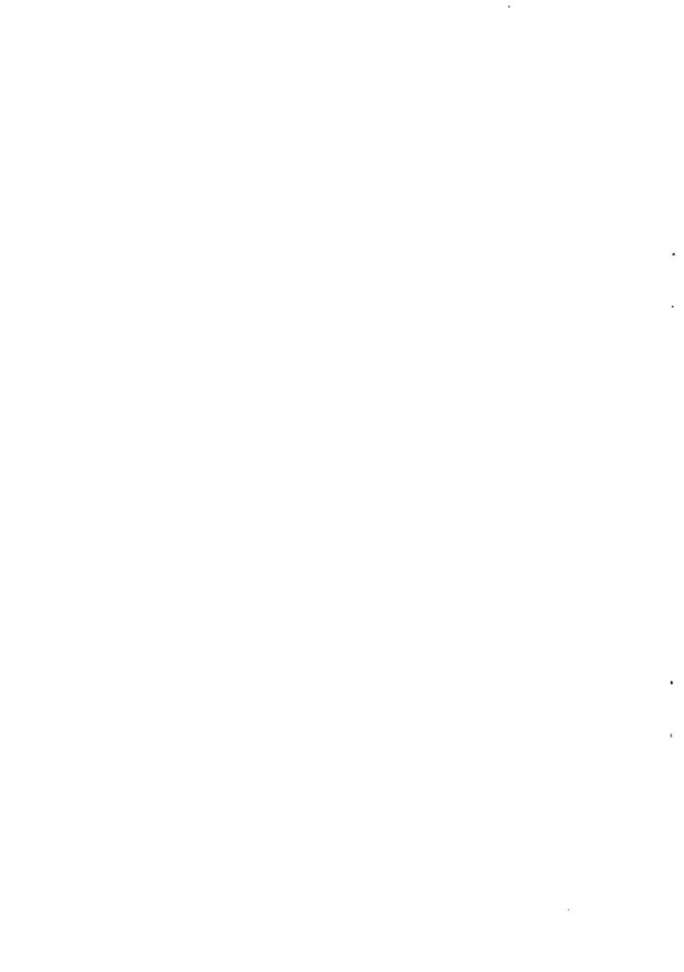


1トレンチ・南端
IV層(暗青色粘土層)
より下層断面〔西から〕



19—中世陶器 20・21—須恵器 5—土鍾 6—土製円盤 22・23—石器 1～4—木器





新 家
(その3)

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

昭和59年3月19日発行

編集著作 発行者	財団法人 大阪文化財センター 大阪市城東区蒲生2丁目10番28号
印刷所	株式会社 中島弘文堂印刷所 大阪市東成区深江南2丁目6番8号

